

第2回環境教育・環境学習ネットワーク会議 議事録

日 時：平成22年2月9日（火） 15:00～17:00

場 所：1号館3階会議室

出席委員：高橋会長、鈴木副会長、内船委員、小川委員、川名委員、斉藤（等）委員、
齊藤（允）委員、佐藤委員、奈良谷委員、野崎委員、原口委員、森委員、
山田委員（13名）

事務局：環境部自然・環境政策課（松尾課長、角尾主査、川村主任）

傍聴者：なし

◆会議次第

1 開会

2 議題

（1）会議の傍聴について

（2）平成22年度環境教育・環境学習ネットワーク会議の役割について

3 その他

◆議事内容

（1）会議の傍聴について

- 自然・環境政策課から趣旨説明
- ・傍聴実施要領の読み上げ。
- ・傍聴方法及び議事録の公開の説明

【質疑内容】

（野崎委員）傍聴実施要領3に「定員に達しない場合は、会議閉会時まで受け付ける」とあるが、会議の途中でも入場可能ということか？

（川村）そのとおりである。

（会長）この実施要領は、市の標準的なものか？

（課長）そのとおりである。

（会長）特にご意見がないようなので、この要領で実施していくこととする。

(2) 平成 22 年度環境教育・環境学習ネットワーク会議の役割について

● 自然・環境政策課長から趣旨説明

- ・来年度の議題を「環境教育・環境学習推進のためのシンボリックな事業の構築」とする。
- ・具体的には、既存事業を再検討し、より環境教育・環境学習効果の高い「シンボル事業」をネットワーク会議で構築する。
- ・構築した事業は、このネットワーク会議が主体となり実施、または、事業実施主体に対して企画提案を行う。
- ・事業構築のための 5 つの課題の確認。
- ・実施方法、実施スケジュールの説明と 3 つの事業例の提示。
- ・今日議論してほしいポイント
 - ① 会議の役割として、事務局が提案をした方向性でいいか。
 - ② 最初のシンボル事業として、何が考えられるか。
 - ③ 委員として提供できる情報、または今後必要となる情報は何か。

【意見交換内容】

(川名委員) 前回の会議で、部長が「みどりの基本計画」と関連して里山保全を環境学習に活用することをこの会議で検討してほしいという話をしていたと思うが、事務局の事業例に入っていないのはなぜか？シンボリックということならば、里山はふさわしいと思う。

(課長) 里山については、新しい環境基本計画には書き込みたいと考えている。里山を作るという方向性は良いが、里山を作っていくには 2 つの大きな問題がある。1 つ目は場所の問題で、公有地には適した場所がないということ。2 つ目は管理の問題で、里山の維持管理を市が単独で行うことは容易ではなく、企業や市民団体の協力など市民協働などで維持していくことが望ましいが、そのためには、知識を持った人の協力なども必要ということ。そうした理由で、現状すぐに実施するのは難しいが、できればやりたいとは思っている。また、今、市民協働モデル事業で進めている芦名堰の保全も、モデル事業の期間である 3 年が過ぎたあと、どう活用していくのかということもある。ここをシンボル事業として進めることもできると思う。

(会長) 公有地がないことがネックであるという話だが、現在県が湘南国際村の B C 地区の利活用の提案募集をしている。この件について詳しい野崎委員に説明してほしい。

(野崎委員) 県は、市民活動団体を対象に一般公募事業と先導事業の 2 つの提案募集をしている。先導事業の場合は県がある程度バックアップする事業となる。公募事業は来年度一般

公募となる。

先導事業として、横須賀市と葉山町の市民活動団体が集まり、環境学習ができる「自然観察の森」を作るという提案をしている。自然復活の事業をしながら、環境学習ができるという「再生と教育」を結びつけるという内容だ。先ほど場所がないという話がでたが、このBC地区という場所が市内にあるので、ここの活用について横須賀市としても関わってほしい。

(高橋会長) 行政とタイアップできれば、市民活動団体の提案も現実味を帯びる。里山はこの方向性で進めることができるのではないか。

(課長) BC地区については県の情報を確認し、環境教育・環境学習の庁内会議等で検討をしたい。

(小川委員) 質問になるが、浦賀の燈明堂の辺りは水質がいいと聞いた。しかし、最近はその周辺が開発されプライベートビーチのようになっているところが多い。市が住友の造船場跡地などを活用する計画があるとも聞いた。市の西側だけでなく、東側でも市が土地を確保して環境教育に生かせればいいと思う。

(角尾主査) 確かにいい場所であるが、今は個人の用地であるので今後の検討課題になると思う。ただ、海岸線は市街化区域なので、その土地への規制は難しいと思う。

(小川委員) 造船場の跡に公園ができるという話は本当か？たとえ良い環境でも、葉山近くまでは授業では行くことはできない。しかし、駅の近くにそうした場所があれば行きやすい。

(課長) 公園の話は、担当課に確認する。東側は市街化区域なので、都市計画決定などの問題もあるが、アクセスを考えると便利で行きやすいことは確かだ。しかし、横須賀市で自然や河川が多く残るのは西側であるので、自然活用の中心は西側になるのはやむをえない。ただ、横須賀市は大きく分けると東西南北の4地区となり、西地区に限らずにそれぞれの地域でできることはあると思う。自然のあるところ、または自然を再生できる可能性のあるところを活用することを考えていきたい。

(川名委員) 具体的に湘南国際村BC地区の話がでたが、シンボル事業の検討の1つに里山をいれるということでもいいか？

(課長) 構わない。

(会長) その場合は、「里山の保全」ではなく保全されたあとで環境学習にどう利活用するかという場の活用と考える。

(鈴木委員) 今の里山の話資料にある3つの例に盛り込むとしたら、2番目になると思う。ただ、実現性から考えれば1番か3番なので、市や学校を中心にできることをまず進める

方がいいのではないか。それが今ここで議論すべきことで、里山は出来上がってから学習の場を利用すればいいのではないか。

(内船委員) 環境を学習する場は必要だと思う。例えば、馬堀中学校では2年前からバレーボールコート跡にホテルの里を作り、学校だけでなく地域と協力してビオトープづくりをしている。その取り組みは素晴らしいが、今後は、「地域にどう繋げていくか」という、もう少し高い視点で考える必要があるように思う。里山として成熟しつつある場所を、その活動を行政センター地域や市域に広げるために、この会議の場で話し合うというのもいいのではないか。

(川名委員) 先ほど、里山活用は保全事業ではなく、その後という話があったが、今の内船委員の話のように、保全をしていく過程が環境教育そのものであると思う。保全するための事業でなく、保全しながら環境教育をやっていく、そうした小さい地点をネットワークしていったらいいのではないか。

(野崎委員) 今の話の先になるのかもしれないが、課題3にもあるとおり、大人・子どもに関わらず、環境教育はいかに実践に繋げていくかということが目指すところだと思う。今の川名委員の話のように、勉強だけでなく、実際に体を動かし、活動して学習することを大事にできたらいいと思う。

(課長) 現在、新環境基本計画を策定中だが、自然環境については「実感できる」ことが大事だと思っている。横須賀市にある自然・資源を享受できることを実感し、それを広め深めることが大事。目的と手段は両方あると思うが、機会を多く持つことは必要と思う。この会議として実施するシンボル事業は一つでなくてもいいと思う。大きいものを一つ作りそれに付随するもの、また期間がかかるものがあってもいい。今日は実現可能性が低いものでも構わないので、意見を出してほしい。

(会長) 先ほど内船委員から実践例を出してもらったが、同様な取り組みは横須賀市内のあちらこちらで行われていると思う。そういった情報を集めて発信して共有することができれば、いろいろな方向に発展するのではないか。ネットワークは非常に大切で、その意味では、例1のホームページの拡充は良いと思う。

(齊藤(允)委員) 私の住んでいる地域では、田を畑に転換した経緯がある。その地域の小川にカワニナがいることを発見し、町内会の有志でホテルを再生する事業を実施している。このことをきっかけに地域の人たちに環境問題に関心を持ってもらいたいと思っている。河川課の協力を得て、近くの小学校の熱心な先生が見に来たりもしている。地域の子供も巻き込みたいが、まだそこまではいっていない。

(会長) そうした情報を発信して、広げる場がほしい。

(小川委員) 例3の取組が具体的にできる見込みがある。総合学習研究会では昨夏に福祉の分野で実践した。このネットワーク会議のメンバーと研究会が協力すれば、来年すぐにでも共同開催できる。若い教師はやる気がある。一般の方に学校のカリキュラムを知ってもらい、学校に地域の良い取り組みを知ってもらうことができる。また、この取り組みの実現で、学校の環境教育を広げていくことができる。

(会長) 学校のカリキュラムという点では、先日5年生で水俣病を勉強することを初めて知った。学校のカリキュラムを知っていれば環境のプログラムをそれに合わせて作ることができるが、現状は逆で「私はこれを教えられる。興味があれば声をかけて」ということになっている。学校のカリキュラムを事前に知っていれば、できることが増える。

(齊藤(允)委員) さまざまな取り組みを積極的に行っている学校は多いが、それは個々の先生のやる気にかかっている。市の教育方針の中で、環境教育は学校全体でやらなければいけない数多い項目の中の1つにすぎないのが現実である。学校で環境教育を進めるためには、先生自身が必要だという認識を持たないといけないが、小学校の先生は非常に忙しい。そのあたりを考える必要がある。

(佐藤委員) 学校で環境教育がなされていないことはない。ただ大きな問題なのは、さまざまな教科の中で環境教育は行われているが、教師側に目的や目標などの意識や理解に課題があるということだ。学校現場としてそれを整理しようとする、環境教育の全体計画を作らなくてはならないが、それを作ることが学校の負担になる。その部分が環境教育を進める上で弱い部分である。

話は変わるが、今日何を話すのかを整理したい。シンボリック事業のキーワードとして、「ネットワーク」と「連携」という言葉が出たが、この会議では、この2つを活用して環境教育・環境学習をこれからいかに横須賀市で推進していくかということだと思う。

その場合に、シンボル事業というのは、今ある事業を市民や団体とネットワーク化して進め、その結果として5つの課題を解決していこうとするものなのか、あるいは、5つの課題解決のためには、どんな事業が必要なのかをまず考え、それをシンボル事業として構築していくのか。この2つをきちんと見定めれば、次の論点が見えてくるのではないか？

例えば、先ほど話にあった学校と地域との小さなネットワークを、市全体のネットワークに広げていくといったように、絞って議論を進めた方がいいのではないか。

(山田委員) 最終的にできるものは多分そうした大きな連携になると思うが、最初からそれはできない。学校だけでなく、広く市民の人にも意識を高めてもらうためには、分かりやす

い既存の事業でシンボリック的なものを据えて、意識を高めてもらう。そうしたイメージでシンボリックな事業を事務局は考えていると思っていた。

事務局の資料では、シンボル事業の目的や対象が見えにくい。目的を明確にすればどんなものをやればいいのか見えてくるのではないか。そのための目的を確認したい。

(川村) この会議のそもそもの目的は「市域全体における環境教育・環境学習の推進」である。その会議の委員に、なぜ多方面の現場で活動された経験のある方をお願いしたかという、環境教育・環境学習には連携・ネットワークが必要であるということを確認しているためだ。委員の皆さんが集まり情報交換するだけでも、一つの現場ではわからないことが見えてきて意義があると思うが、その次のステップとなるものを考えたいと思っている。個々の事業で必要に応じてできたネットワークの在り方を踏まえたうえで、この会議では大局的な視点で、市域で環境教育・環境学習を進めるために必要なネットワークとそれを活用した事業を構築することができればと思っている。例としてお示したものは行政の視点が強いと思うので、これにこだわらずに全く違った事業を提案していただいて構わない。シンボル事業が「オールインワン」である必要はなく、今後進めるためのきっかけとなればよいと思っている。

(佐藤委員) 来年度一年をかけて決めるということか。

(川村) 基本的にはそう考えているが、どのくらい準備期間がかかるかも事業によって変わると思う。随時実施できるもの、来年度準備をして再来年実施できるもの、準備に2～3年かかるものもあると思う。いつから始めるものでも構わない。

(原口委員) シンボル事業とは少し違う話となるが、学校現場では、環境教育・環境学習はそんなに浸透していない。自分の経験で感じるのは、子ども、教師ともに自然体験が少なく、環境教育・環境学習の魅力をわかっていない人が多いので、そこが問題だと思っている。自分はできるだけ体験をさせるようにしているが、そうした体験の具体的なイメージができない教員も多い。すかつ子セミナーのように子どもたちに学校教育の中で、自然体験をさせるような機会を持ちたい。また、教員自体が環境教育の体験学習する機会を設ける。レベルの高い位置からでなく、そうしたところからの取り組みが必要かと思う。今の5・6年生は、美術館や音楽鑑賞などの芸術分野を経験する機会が多い。同様に環境を体験する機会を横須賀市として設けてほしい。全市的には難しいかもしれないが、例えば里山体験を募集で実施するなどいいのではないか。もちろん学校現場でできればいいが、なかなかそこまでの時間がとれない。市でこうした事業を行えば、学校の環境教育・環境学習は進むと思う。

(会長) これまでの話は学校教育に偏っていたので、事業者の方の話も聞きたい。

(森委員) 子どもに環境について学ばせるのは賛成だが、それを学校教育に限定しなくてもいいのではないと思う。生涯教育・生涯学習での進め方ならば商店街でも生かしていける。私の商店街の売り出しの景品は、毎年環境に良いものを選んでいく。今年は手作りのアクリルたわしを考えている。そうした小さい取り組みの積み重ねを継続して、それが繋って大きなネットワークになればいいのではないかと。確かに急いで取り組まなくてはいけないのが環境問題だと思うが、少しずつ進めていくことが早道になるのではないかと。委員の皆さんからそういった提案もききたい。

(会長) 他の商店街も同じような取り組みをしているのか。

(森委員) 他の商店街の情報はあまり入ってこないが、自分の商店街は温暖化対策地域協議会の緑のカーテンモデル事業を実施したこともあり、環境の取り組みは進んでいるように見られていると思う。今後、同じような取り組みを進める商店街がでるよう、連合商店街などの場で呼びかけていきたい。

(小川委員) 話の進行を確認したい。事務局のシンボル事業の3つの例は、1つめが市事業の拡充例であり、2つめは既存事業の連携例であり、3つめは新規事業の例であった。私はその中で3の例ならば実現可能だという発言をした。それには、事務局資料で、「第3回会議でシンボル事業決定」とあるので、このスケジュールで進めるためには、今日どういった事業にするかの具体的な話をしないと間に合わないと思ったためだ。シンボル事業の準備年数は決めないという話もあったが、委員の任期は2年なので、できることなら早めに実施した方がいいと思う。

そのように来年度できる方向で進めるのか、もっと時間をかけて進めるのかを確認したい。

(会長) 今日の流れとしては、たくさんある現在の課題を議論した上でシンボル事業を模索していく、あるいは、その議論の過程でシンボル事業の提案があればいいと思っていた。

(課長) この会議で大きな事業を構築し、そのステップ的な事業として小さい事業を実施するというのが「シンボル事業」では理想だと思う。しかし、それは現実的に難しいので、この会議でできることを1つでも2つでもできればという話を前回の会議で話した。3つの事業例は、あくまでも例であるが全てネットワークの活用という視点で構築している。そもそも、ネットワークには2つの意味があり、それは各主体の人を繋げることと、事業展開の中で事業自体を繋げるということである。事業例でいえば、1と2は事業を繋ぐネットワークであり、3は人を繋ぐネットワークである。

例えば、委員の皆さんが、この例は現実味があるということであるなら、次回までに具体

的な案を考え、里山のように新規の提案があれば、その方策を考えることは事務局で行いたい。ただ、その際に委員の皆さんも役割を持っていただきたい。

市民活動団体・企業・町内会・学校等のそれぞれの持ち味を生かした役割分担や協働で事業ができればいいと思う。小さい事業でも実施することで次のステップに進めると思う。今回は、この例の検討あるいは、例にない事業についての提案をお願いしたい。先ほど話が出たが、里山については大きな事業であるので事務局で少し検討させてほしい。

そもそもは、この会議で「シンボル事業」を実施するというでいいのかを確認したかったが、それに異論がなければ事業を検討することで進めたい。そして次回には事業案をつくりたいと思っている。

(会長) シンボル事業について他に提案があるか？

(野崎委員) 例3の学校との連携に興味を持った。学校では地域のことがわからないという話があったが、私自身が指導者として学校に行く場合も、学校のカリキュラムがわからないので、自分のメニューを提示するしかなく、連携が十分でないのを残念に思っている。相互の立場を理解するためにも、こうした事業はいいと思う。また、人材育成をする必要がある。今日は環境の中でも自然の話が多くてだが、地球温暖化や廃棄物など環境にはさまざまなテーマがあるので、自分の専門以外にも学ぶ必要がある。そのためにも、いろいろなノウハウを持っている人との連携ができればと思う。

(小川委員) 学校の若い先生は非常にやる気があって優秀だが、地元出身者が少ない。そのため横須賀市のネットワークがない。例3の講習会ができれば、そこでネットワークが生まれる。もし、教員の参加者が少なかったとしても、一人の教員が習得したものは、何百もの子どもたちに影響を与えることができる。いろいろな方の話を聞くことは、若い教師にとって非常に有意義だと思う。

(鈴木委員) 3年前くらいから近隣の小学校で環境教育を実施している。子どもたちを会社に招き、温暖化をテーマに見学や実験を中心に行っている。子どもの興味をひくためには講義だけでは難しい。本音を言えばこうしたことを企業に頼るのでなく、先生がやってくれればと思う。また、他の企業もこうした学校等に対する環境教育の取り組みをどんどん進めてくれればと思う。それぞれの企業が地域に還元すればいいし、学校の先生対象の学習会をすることも有効だと思う。

(斉藤(等)委員) コミュニティセンターでは身近なところから取り組んでいる。環境の講座としては「もったいない」をテーマに古布の活用などを行った。大人に身近にあるものを「本当にもったいない」と感じてもらえれば、子どもたちにも発展できるのではないかと

思っている。コミュニティセンターでは、環境の講座だけに特化できないが、今後も継続して実施していきたい。

(奈良谷委員) 私は環境教育指導者だが、市の依頼ではなく、近所の学校から個人的に依頼され、ここ数年環境学習を実施している。学校との関係は、熱心な先生が異動すると繋がりが切れる傾向がある。その経験から「シンボル事業」で必要なのは、学校と環境学習の指導者との橋渡しだと思う。今のままでは広がりががないので、それを解決する事業をおこなってほしいと思う。

(斉藤(等)委員) コミュニティセンターでは夏休みなどに子ども向けの講座も実施している。そのときに、学校の先生が子どもに一言「この講座はおもしろそう」などと進めてくれると、子どもが関心を持ってくれる。

(山田委員) シンボル事業を実施することに異論はない。今までの議論の流れから、学校を核にして、そこから発信した方が、情報が伝わりやすいのではないと思う。学校から地域や保護者などに伝えるという方法が効果的だと思う。直接大人に伝えるための広報なども必要だと思うが、その時にも大人には自分自身のためよりも、「子どもの未来のために」と言ったほうが動かしやすい。

(佐藤委員) 学校は「学習指導要領」という法に準じた基準があり、その枠組みの中で授業を実施しなくてはならず、その中の一つに環境教育は位置付けられていることを認識してもらいたい。「学校教育を通して」というのは一つのキーワードとしてあると思うが、それのみを進めて、学校が全てを担うということは、現状の忙しい学校教員は無理である。それを踏まえた上で、学校教育とうまく連携をとりながら、この会議の目的である環境教育の推進を考えていただきたい。学校教育の担当者としてお願いしたい。

(課長) 「シンボル事業」についてだが、今回提示したスケジュールは平成 23 年度予算が必要なものを実施するという流れで作成した。だが、すぐに大きなシンボル事業を立ち上げるのではなく課題解決をしながら、できることを組み立て、その流れで大きな事業を起こす必要ができればそれでもいいと思う。

事務局としては、今日示した 3 例について、素案レベルに引き上げたものを次回提示したい。里山についても検討したい。人材育成のしくみづくりも示したい。

来年度中にできるものがあれば、この会議で実施する。そうした進め方を提案したい。

(会長) すぐやれることとして提案したいのは、市が実施している「こども環境フォーラム」の改善だ。小中学校の「環境活動報告会」として 10~15 校くらいに参加してもらうイベントにして、この会議が主体となり実施することはどうか。保護者や関係者などの集客も

見込めるし、このイベントから環境活動が市域に広がることが期待できる。こうしたことなら、比較的容易に実施できるのではないか。

(小川委員) 10～15校の参加というのは、総合学習の時間が少なくなっている現状では厳しいと思う。ただ、理想を高く持つことはいいことだと思うので、学校が参加しやすいような仕組みや整理が必要である。

(課長) 「こども環境フォーラム」は今年で3年たち、見直しすることは考えていた。今年のフォーラム参加者は200人くらいだった。参加者を増やすためには、時期や場所・やり方等を検討しなくてはと思っている。その際にはぜひ協力をお願いしたい。

(会長) では、本日はこれで終了とする。

【事務連絡等】 第3回は5～6月に開催する。日程調整を4月以降行う。